走れメロス (2)

　メロスは単純な男であった。買い物を背負ったままで、のそのそ王城に入っていった。たちまち彼は、※巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの※懐中からは短剣が出てきたので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは王の前に引き出された。

「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳をもって問い詰めた。その王の顔は蒼白で、眉間のしわは刻み込まれたように深かった。

「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは、悪びれずに答えた。

「おまえがか？」王は、※憫笑した。「しかたのないやつじゃ。おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」

「言うな！」とメロスは、①いきり立って反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑っておられる。」

「疑うのが正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲の塊さ。信じては、ならぬ。」暴君は落ち着いてつぶやき、ほっとため息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「何のための平和だ。自分の地位を守るためか。」今度はメロスが②嘲笑した。「罪のない人を殺して、何が平和だ。」

「黙れ。」王は、さっと顔を上げて報いた。「口では、どんな清らかなことでも言える。わしには、人のはらわたの奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、今にはりつけになってから、泣いてわびたって聞かぬぞ。」

「③ああ、王は利口だ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟でいるのに。命乞いなど決してしない。ただ、――」と言いかけて、メロスは足元に視線を落とし、瞬時ためらい、「ただ、私に情けをかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ばかな。」と暴君は、しゃがれた声で低く笑った。「とんでもないうそを言うわい。④逃がした小鳥が帰ってくると言うのか。」

「そうです。帰ってくるのです。」メロスは必死で言い張った。

※巡邏の警吏…巡邏は警備のために見回ること。警吏は警官。
懐中…ふところの中。　憫笑…哀れんで笑うこと。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「いきり立って反駁した」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア　唐突に、別の話を切りだして反抗した。
イ　落ち着かない様子で、不安げに反対した。
ウ　激しく怒って興奮し、いきまいて反論した。

［　　］

(2) ――線②「嘲笑」の意味を選びなさい。

ア　あざけり笑う。　イ　思わず笑う。　ウ　苦々しく笑う。

［　　］

(3) ――線③「ああ、王は利口だ」とあるが、このときのメロスの様子として適当なものを選びなさい。

ア　人の心を見抜くことができるという王に感心しつつ、言い返すべき内容を考えている。
イ　自分の考えを言い当てられ、驚きながらも三日間の日限を認めさせようとしている。
ウ　自分の覚悟も知らないのに、心を見透かしたかのように話す王を皮肉っている。

［　　］

(4) ――線④「逃がした小鳥が帰ってくると言うのか」とはどういうことを言おうとしているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　逃がした小鳥が帰ってこないように、メロスも帰ってくるはずがないということ。
イ　逃がした小鳥がいつかは帰ってくるように、メロスも帰ってくるだろうということ。
ウ　逃がした小鳥が帰ってくるとは限らないように、メロスも帰ってくるかわからないではないかということ。

［　　］

(5) 人の心を疑うことに対して、メロスと王はそれぞれどのように考えているか。解答欄に当てはまる言葉を本文中から書きぬきなさい。

メロスは、人の心を疑うことは［　　　　　　　　］だと考えており、
一方、王は、人の心を疑うのは［　　　　　　］だと考えている。